博物館学教育における課外活動実践とその成果

小野　真嗣*・松崎　夏実**

はじめに

現在、博物館学芸員養成課程は多くの大学で設置されており、多くの学芸員有資格者を輩出しているが、学芸員のポストは限られており、なかなか学芸員として職を得ることは難しい状況である。筆者は明治大学と和洋女子大学で博物館学に関する授業を担当しているが、例年授業内で受講生を対象としたアンケート実施している。そのなかで、なぜ学芸員資格を取得しようと考えたかを問う設問があるが、驚くほど多くの学生が「とりあえず資格を取っておこうと考えて学芸員養成課程の授業を履修した」と回答しているのである(1)。つまり、「学芸員資格」を取得することが目的であり、学芸員になることが目的でない受講生が養成課程のかなりの割合を占めているのが現状であるということになるのだ。

ある程度想定していたこととはいえ、その現状を認識してからは、授業において学芸員を輩出するという目的以外に、学芸員資格とその知見が、学芸員以外の職業でどのように活かせるかについてを含んだ内容を展開することを行っている。

筆者（小野）は自らが学生であったころ、当時明治大学学芸員養成課程で教鞭をとられていた吉田優先生が学芸員養成課程受講生を対象に実施されていた地域調査や地域博物館研究活動に参加し、多くの知見を得るとともに博物館学に対する考え方について大いなる影響を受けた(2)。その考え方は、理論と実践をどちらかに偏ることなく均等に学修することを重視したものであり、学生に多くの実践の場を提供しようとするものである。これらの実践を経験した者からは多くの学芸員を輩出しており、その手法がいかに有効なものであったかがわかる。筆者も教員となってからは、明治大学及び和洋女子大学の博物館学・学芸員養成課程受講者を対象とした地域調査や地域博物館研究活動を行ってきた(3)。

一方で、大学と地域社会の連携の重要性が指摘されるようになってから久しいが、この点にも着目した研究を実施している(4)。すなわち、地域社会と大学の連携事業には、博物館学や学芸員養成課程が果たすことのできる機会が多くあり、特に地域文化芸術の面に関しては大きな役割を果たせるのではないだろうかという考えに基づいた実践型の研究である。また、これらの取り組みは地域社会のみならず「学芸員資格」を取得することを目的とした受講生にも有益なものとなると考えている。

本稿では、博物館学教育における課外活動について具体的な実践例を挙げながら、実施過程と成果について考察していきたい。今回取り上げる企画は2022年6月10日に、千葉県の勝浦市にて開催された「かつうら朝空マーケット×和洋女子大学 シルクスクリーン体験＆出張展示」企画と、2022年11月20日に東京ビックサイトにて出展した「DESIGN FESTA Vol.56」での活動である。双方とも、筆者らが所属する和洋女子大学日本文学文化学科文化芸術専攻生ないし、文化芸術専攻へ

＊和洋女子大学人文学部日本文学文化学科 准教授　＊＊和洋女子大学人文学部日本文学文化学科 学科付職員

の進学を目指す学科所属の1、2年生の有志学生が任意に参加した企画となる。昨今、芸術系大学の地域社会との連携はアートプロジェクトなどと称され盛んに行われているが[5]、本専攻においても、大学で学修した知識や技術を学外で実践し、地域社会に貢献していくことを目指している。DESIGN FESTAに関しては専攻設立時より、学生の作品発表および学校紹介を出展内容としてほぼ毎年出展しており、例年1年生から4年生を合わせおおよそ20人前後の学生が出展に参加している。一方の勝浦市でのイベントは今回が初めての試みとなる企画となり、開催する地域の特性やイベントの趣旨などを入念に考慮しつつ参加する学生の知識や技術を効果的に生かすことができるよう、出展内容や企画運営などを一から設計しての取り組みとなったものである。

【図1】「かつうら朝空マーケット」チラシ（表）

第1章　かつうら朝空マーケット×和洋女子大学 シルクスクリーン体験＆出張展示

1. 概要と目的

本企画の概要としては、勝浦市が地域活性を目的にすでに知名度のある勝浦朝市と連動して取り行っている月例イベント「かつうら朝空マーケット」において、文化芸術専攻がアート系ワークショップの実施と作品展示を目的に出展したプロジェクトである。本専攻のOGが勝浦市の広報課で勤務していることをきっかけに、地域においてアートの理解を深めアートを通じて町おこしができないだろうかという課の要望と、学生が大学で培ってきた知識や技術を活用しアートコミュニケーションや自身の作品の発表を課外活動として実践していきたい大学側との双方の目的が合致したことによって成立した企画といえる。勝浦市職員と教員間にて企画の趣旨と目的を確認するための打ち合せを行った後は、具体的な実施内容に関して大学側に一任され、企画案を実施の3か月前に提出し承認、1か月前には現場の下見や具体的な会場準備に入っ

【図2】「かつうら朝空マーケット」チラシ（裏）

たという流れである。

前提として、勝浦市の朝市は全国的に知名度や話題性も高く、市の内外から人の出入りが多くあったようである。COVID-19の影響により観光客数が減り、また、市の活気も落ちてしまったという状況で勝浦市が企画したのがシャッター街と朝市を活用した「かつうら朝空マーケット」というイベント母体である。本来は観光客の動員を主目的とした企画であるようであったが、COVID-19における情勢回復に時間を要したため、外部の観光客よりも内部の地域住民に向けた取り組みとして定着したようである。月例イベントのため、これまでにもいくつかのイベントを企画してきたとのことであるが、企画の種類は多岐にわたり、まち歩きや自然体験、地元の野菜販売やワークショップ等がこれまでに開催されている。今回我々が企画するようなものづくり・アート系ワークショップ関連の参加者層としては、幼児から小学校高学年の子どもないし家族連れが多い。また、事前に広報物などから情報をキャッチし、イベント参加への目的意識がもともとある市民とそうでない市民とがまちまちのため、参加へのハードルが高くなく気軽にふらりと寄ることのできる交流の場とすることが求められた。

以上のような前提と本専攻の学修の成果をすり合わせた結果、シルクスクリーン（版画技法）を活用した体験型企画と、授業及び部活動などで制作した学生作品展、二つの企画を実践することとした。シルクスクリーン技法は、大学ならではの専門的な版画技法でありながらもこのようなイベントにおいて質の保たれた活用性の高い技術であり、ある程度大学側での準備を整えておけば未経験者や小さな子どもでも取り扱いが可能である。今回は学生がデザインした「かつうら朝空マーケット」にまつわるオリジナルのデザインを、トートバックや巾着などにその場で印刷し持ち帰ることができるといった企画となる。ワークショップでの交流の他に、イベントへの参加意識があまり高くない保護者層や高齢者に向け、学生が自身で手掛けた制作物を介しながら鑑賞活動を通してコミュニケーションをとるという目的も持っている。また、当日のワークショップスタッフや展示の設営、事前準備も含め、すべて学生が主体的に運営することとなる。一口に事前準備といっても、ワークショップでいえばおおよそ30種類のデザインの考案と版の制作、作品展でいえば展示計画の設計、キャプション作成や額装及び梱包作業等も含めてである。特に今回は、初めての環境下での活動であったため、会場の間取りや水道、電源の位置、借用備品といった細かいながらも現場において漏れがあってはならない微細な確認事項が多く、先方とのこまめな打ち合わせが必須であった。今回の一連の企画は、教職員の引率が2名、当日の現場にあたる学生スタッフ4名の計6名が主軸となって運営し、ワークショップ用のシルクスクリーン制作や展示作品の出品、展示にかかわる事前準備などには、その他多くの文化芸術専攻生が有志として参加した。

【写真1】　シルクスクリーン制作

このように本企画は、ワークショップを通じて学生たちが学んできた知識や技術を、地域の人々とのコミュニケーションに活用すること、学外での展示活動を通じて博物館学芸員養成課程における学びを現場的に経験すること、そしてこれらを通して培うことのでき

る計画力、行動力、実践力の向上を目的としたものである。特に近年の学生はCOVID-19の影響により、学外活動に大きな制限がかけられていたため、作品の発表活動や現場での展示実践の経験を積めないまま2年間が経過してしまった。そのため、今回は企画の方向性を定めるプロセスや全体的なスケジューリング、連携先の勝浦市とのコンタクトには教職員がフォローに入り、計画が定まった後のワークショップ及び展示にかかわる現場的な作業には学生が中心となって取り組む形となった。

2. 企画の経過

まず、展示の設営に関してだが、イベント当日の開催時間は朝市と連動しているため、午前9時から12時までの計3時間と短時間である。よって、展示の設営は前日の午後と当日の開場時間のまでの間に済ませる必要があった。今回実施した会場はシャッター街にある貸店舗を1フロア借用しての展示となり、壁面の展示には可動式の有孔ボードとU字フックを用いる形となる。このような展示の方式は、ギャラリーのほか学校や貸会場といった多くの施設で汎用的に取り入れられている。多少細かな話になるが、本専攻で比較的取り扱うことの多い平面絵画においても様々な展示方法とそれぞれに必要な備品が存在し、今回のような有孔ボードとU字フックを用いる展示のほかに、ピクチャーワイヤーを用いてレールから吊るす方法や壁面にXフックを直接打ち付けて吊るす方法などがある。それぞれの方法によって、作品の位置の調整のしやすさ、フックの耐久性や必要となる工具、備品にかかる金銭的なコストといったメリット及びデメリットが存在する。また、キャプションの取り付けにおいても虫ピンとピンタッカーを用いるケースや、ひっつき虫や画鋲、両面テープを使用する方法などがあり、ピン類やテープ類についてもあらかじめ

【写真2】　展示設営（1）

【写真3】　展示設営（2）

使用許可の確認を取らなければならない。このように、作品を吊るしキャプションを付すという作業だけ見ても展示会場ごとによって保有している備品や使用規定が異なる。今回は市のご協力のもとで会場を借用させていただいたため、会場の使用に金銭的な費用は発生しなかったが、多くの貸しギャラリーや展示室においては、厳密なレンタル時間によって会場の使用料金などが変わってくるため、搬入や設営にかかる作業時間や手順を、あらゆるトラブルを想定しながら準備に取り掛かる心構えが重要である。会場ごとに異なる設営環境は、展示経験を重ねた分だけ技術的な知識やテクニックを蓄えることができるため、それだけでも今回の出張展示には実践を行った価値があったといえるだろう。

当日の来場者数は想定以上に多く、ワークショップにおいても用意していたバック類が

【写真4】 イベント当日の会場風景（1）

【写真5】 イベント当日の会場風景（2）

【写真6】 ワークショップの様子

開始2時間近くで配布終了してしまう盛況ぶりであった。ワークショップの段取りとしては、実際に想定したタイムスケジュールで実施できていたものの、来場者が想定以上に多く、1名の受付スタッフと5名のワークショップスタッフでは手一杯になり、ワークショップにも待ち時間を要してしまう状況になってしまった。本来であれば展示のほうにも学生スタッフを配置し、自身の制作した作品を紹介・解説しながら地元住民の方々と対話的なコミュニケーションをとっていくことが理想形であった。ただ、体験企画の待ち時間の間に来場者が自然と展示鑑賞に流れていたため、フロア全体の空間的な構成や動線、鑑賞しやすい空気づくりには成功していたと考えられる。その代わりに、ワークショップでは学生スタッフが来場者へ一対一で対応にあたる中、オリジナルのデザインを介して対話が生じたり、シルクスクリーン技法の仕組みについて解説したりと、学生が企画全体に関わっているからこそ可能となるコミュニケーションが常に生まれていたことを強く感じた。また、勝浦市職員の方々が会場来場者への人員整理、ワークショップスタッフのサポート、来場者へ本企画にかかわる要旨の説明など、臨機応変にご協力いただけたことも現場を切り盛りしきれた大変大きな要素である。役所のほうで勝浦市内における的確な広報活動や口コミの働きかけがあったからこそ、想定以上の来場者が見込めたということもある。外部での活動において、連携先の運営スタッフと協力的な関係性を築いてゆくことは、現場を円滑かつ効率的に回していくために必須のスキルである。今回の企画を立ち上げるのにも、近年の勝浦市民の動向や市の地域性、朝市や「かつうら朝空マーケット」の運

【写真7】 ワークショップ作品

営状況など、その地の人々の様子や現場の空気感を肌で把握している勝浦市役所の職員の方々がいてこそ、地元住民にとっても大学側にとっても双方の需要がマッチングした効果的な企画が実行できたと言える。

そして、初めて本格的な課外活動へ主体的に取り組んだ学生たちにとっては、一つの企画を立ち上げることにかかる時間的・肉体的なコスト、学外で行うことによる責任感やスケジューリング能力、現場的な対応能力の重要性を体感できたことだろう。そして何より、自らの知識や技術を介して、地域の人々とコミュニケーションをとることができるということへの純粋な楽しさや自信を自覚ができたのではないだろうか。微細な反省点も多々あるものの、今回の事業の参加による成果と自信を糧に、学生が今後の課外活動への参加意欲を高めてくれたのであれば、我々の本望である。

第２章　DESIGN FESTA Vol.56

１. 概要と目的

もうひとつの課外活動実践例として、「DESIGN FESTA」への出展を挙げる。DESIGN FESTAとは毎年春と秋に東京ビッグサイトにて開催され、一度の出展に１万人以上のプロ・アマチュアアーティストの参加、約６万人の来場者がある国内最大級のアートイベントであると謳われている。主な出展内容は制作物の展示や販売、パフォーマンスやライブペイント、ワークショップ等多岐にわたる表現活動が許可されている。個人での出展はもちろん、グループでの活動や我々のような学校団体での出展もみられ、文化芸術専攻もCOVID-19の影響下にある2020年、2021年を除き、毎年11月に出展しているプロジェクトである。本専攻の出展内容としては、大学の制作物の展示及び販売、専攻の学びを中心とした学校紹介を中心としている。参加学生は例年20名から30名の専攻生有志（専攻に所属していない学科生１、２年生も含む）で、年度ごとに学生代表や副代表、その他会計等の役員を定め、具体的な出展内容についても最初から学生たちに企画をデザインしてもらう運営方式である。前述した勝浦市の事例と異なり、出展にまでに必要なワークフローや事務的な手続き、定められた予算内での企画の立ち上げや学生間での業務の分配等も、役職のついたものを中心にすべて学生主体で運営していくことが慣例となっている。

DESIGN FESTAへの出展には自身の制作物を発表することと同時に、一連の事業をこなすための企画及び組織作り、運営方法を体系的に経験する機会となるよう目的づけている。また、それを外部で発表することにより、同時に出展している様々なアーティストや創作物、独創性のあるプレゼンテーションに触れ、柔軟で多様的な表現能力の獲得を目指す。冒頭でも述べた通り本専攻の目指す表現

【図３】　和洋女子大学DESIGN FESTAポスター

教育とは、大学の学びで得た知識（芸術学、博物館学、ポピュラーカルチャーやその周辺業界に関する動向や知識）や技術（古典から先端にかかる広い実技的な表現手段、道具や機器を適切に取り扱う能力）を横断的に絡み合わせ、その総体を地域社会において発表できるプレゼンテーション能力及び実践力を身に着けるところまでとしている。今回のDESIGN FESTAへの出展にかけての運営では、7月から11月にかけての中期的な期間をかけ、3年生が中心となって組織を動かすこととなる。本来であれば、毎年参加している積極的な学生を主軸に例年の流れや業務を引き継ぎ、イニシアチブをとるという形態が持続的に行事や課外活動を形作る理想的な姿ではあるが、現状においてはCOVID-19の影響により参加経験のある学生が一部の4年生のみという実状であった。しかしその一方で、学生メンバーが一新したことにより、自然と固定化されてしまった過去の出展の定型のようなものに縛られすぎることなく企画が進められ、これまでに見過ごしていた課題や改善点に気づくことができたというメリットもあった。これらの前提を踏まえ、より具体的な取り組み方や出展した結果、企画一連に参加したことによる成果について続けて考察していきたい。

【写真8】　ミーティングの様子

2. 企画の経過

DESIGN FESTA出展当日を迎えるまでに取り掛かる業務内容について、時間を追いながら整理すると次のようにまとめられる。まず、最も初めに行うことは出展ブースの申請となり、7月ごろにDESIGN FESTAに出展するメンバーやそれぞれの役職を定めたのち、出展内容を大まかに取り決めブースの種類や広さを指定し申請する。その後、出展する内容物の制作に取り掛かることができるよう、具体的な企画内容を詰めるミーティングを重ね、個人制作物や展示物、広報物の作成といった作業に入る。

出展内容については今年度も例年の通り、個人販売物の展示および販売と、専攻の学びを中心とした学校紹介の展示を取り行うこととなった。しかし、近年の出展内容を振り返った際に、販売物の制作や展示物の作成、ブース全体の空間づくりが通例化・形式化してしまっているという問題意識が、教職員と学生間の共通認識にあった。DESIGN FESTAへ出展し始めた当初は、当時の学生が持つ知識や技術をどのような形で発表するのかという明確な目的意識やDESIGN FESTAにおける消費者の需要、制作環境や機材環境など、様々な条件をすり合わせて一つ一つの出展内容が企画されていたのだろう。大学の課外活動における共通の経年的課題として、事業を継続的に活性化・発展化させていくためには、ある程度中・長期的なプロジェクトとして試行錯誤を繰り返しながらブラッシュアップをしていく必要がある。しかし、学部における4年間という制約は想像以上に短く、経験のある学生が次々に入れ替わってしまうことで、業務の引継ぎや過去の成功例・失敗例・問題意識の共有が断たれ、再びほとんど一からのプランニングという事態に陥ってしまう事例も多くみられる。その点、本専攻のDESIGN FESTA出展者は、一度参加した学生の次年度以降の参加率が非常に高く、学生

間での業務の引継ぎや情報共有が効率的になされていることが確認できる。

ただしその一方で、毎年参加しているメンバーが多いと企画内容や出展方式が通例化してしまいがちになるという懸念がある。指導者の立場としては、その年ごとに過去の企画内容の共有と反省、それらを踏襲したうえでの立案とそのブラッシュアップというプロセスだけでも、20名前後の集団から意見や考えをボトムアップし合意形成を図ることは容易ではない。今回は比較的ネガティブな側面から通例化というとり方をしたが、経験した成功例や効果的であった方法などは積極的に引き継ぐべきであることは言うまでもない。これまでの経験則を引き継いだうえで、何を残し、何を改善すべきかという問題意識をその都度巡らせることが、持続的・効果的に一つのプロジェクトを発展化させるために重要な姿勢であると考える。

特に今回の出展内容で大幅に改善をなしたのは、専攻紹介における展示方法と、全体的な空間づくりにある。DESIGN FESTAは大規模かつ無審査のアートイベントであるということもあり出展者ごとに出展内容の自由度や独創性が非常に高く、展示や販売における内容物のクオリティももちろんだが、限られたブーススペースを効果的に活用した展示構成や空間づくりも極めて重要である。例年の展示構成を見てみると、展示作品や専攻の紹介パネル、看板等の各々に内容的なクオリティはあるものの、一つ一つの要素の形式的な統一感や視認性及び可読性、見る者の目を引くような空間づくりという点からは、いまひとつ効果的な展示ができているとは言い難い状態であった。そのようになってしまう原因はいくつかあり、まず第一に、展示の設計図や完成イメージが出展メンバー内で明確に共有できていないことが挙げられる。というのもこのような団体で作業や準備に当たる際、均等に業務を分担すると量的な公平性は保たれるが、作業が個人の視野に限定されてしまい全体的な進捗や状況が確認できず、各々の作業クオリティにムラが生じてしまう。その結果、展示として形を成しても、それを構成する一つ一つの微細な展示物としての要素（展示物の吊るし方、パネル・看板を構成するフォントの種類や文章の配置、キャプションや値札の表記方法など）がばらけてしまい統一感のない展示空間となってしまう。

二つ目の理由としては、自身の持っている展示にかかわる知識や経験、展示物の作成に応用できる技術を持っているにもかかわらず、実践的な行動に結び付けられていないということも展示が一様化してしまう大きな要因にあるだろう。冒頭でも学芸員資格取得に関する意識やその現状について述べたが、大学で学修した知識・技術を自らが現場の当事者として発揮するという意識が希薄であるこ

【写真9】　展示設営

【写真10】　和洋女子大学ブース

とがうかがえる。

それらを踏まえ、今回は次にあげる三点の改善と運営を試みた。一点目はブーススペースの使い方である。これまでブーススペースに対して、制作物や販売物よりも専攻や大学案内に関する展示の比率を多くとっていたため、全体を概観した際にオープンキャンパス的な印象を強く与えてしまっていた。先に述べたように表現性・独創性の高いアートイベントであるDESIGN FESTAにおいては、展示作品や制作物の販売を目的に来場する消費者が大多数である。そのため、今回の専攻の出展としては個人制作物の展示及び販売スペースを広げ、来場者の需要と出展者の供給が循環するよう発表内容の比率的な調節を行った。

二点目は、専攻と大学案内に関する展示の内容及び展示物の作成方法の一新である。これまでは、文字情報を中心とした授業紹介の列挙が全体的な展示の三分の一程度を占めていたが、やはり一部の大学関係者及びデザインやアートプロジェクトに携わる企業関係者を除いては、大学紹介を目的としている来場者はほとんどいない。よって、受験生の獲得を目的とした詳細なカリキュラムの展示を行うというよりも、個人が有するスキルや大学で学修した成果を活用し、消費者の楽しめる空間づくりを行うという趣旨にウェイトを置き、一般の来場者にとってブースに立ち入りやすい印象づくりを心掛けた。具体的には、列挙していた授業紹介のパネルを大幅に減らし、最もアピールすべき授業や産学官連携事業の紹介を必要最低限に絞った。そして、文章を中心としたラミネート加工の展示を取りやめ、テキスタイルプリンターに使用する布製のロール紙を活用して文章の印刷や絵画用画材での着彩及び装飾を行った。デザインにはAdobePhotoshop及びillustrator等も活用し、大学で学んだ多様な素材や機材を取り扱う技術、デザインや博物館展示に関する知識を横断的に組み合わせるといった工夫を行うことにより、本専攻生であるからこそ生み出せる展示空間となった。

そして最後の点は、学生自身による組織の運営の仕方や業務の振り分け方についてである。これまでの運営では役職のついた2、3名の代表学生が中心となって業務の指揮をとっていたが、大学の有志活動において一斉的な指示を集団の末端まで通すことはなかなか難しく、どうしても都度個別対応が増えたり情報共有の漏れが生じてしまったりと、主導している学生の負担が過重気味になりがちである。そこで今回は、DESIGN FESTAに関する活動曜日及び時間帯を設定したうえでその中にサブリーダーを配置し、サブリーダーを通しての情報共有、制作や業務にかかわる指導を行えるよう、集団内の役職配置を明細化した。このことにより、役職者を通じ円滑に

【写真11】 デザイン制作

【写真12】 着彩・装飾

業務の進捗や組織内の状況を確認することができ、なおかつ作業量及びクオリティのムラの軽減につながった。

第３章　課外活動実践の成果

1. かつうら朝空マーケット

「かつうら朝空マーケット」におけるワークショップ及び作品展示は、専攻の学修の成果をすり合わせた結果、シルクスクリーン（版画技法）を活用した体験型企画と、授業及び部活動などで制作した学生作品展という芸術ワークショップと博物館展示が融合したものであり、ワークショップを通じて学生たちが学んできた知識や技術を、地域の人々とのコミュニケーションに活用すること、学外での展示活動を通じて博物館学・学芸員養成課程における学修を現場的に経験すること、そしてこれらを通して培うことのできる計画力・行動力・実践力の向上を果たすことができたと考えられる。

また、ワークショップでは学生スタッフが来場者へ一対一で対応にあたるなか、オリジナルのデザインを介して対話が生じたり、シルクスクリーン技法の仕組みについて解説したりと、学生が企画全体に関わっているからこそ可能となるコミュニケーションが常に生まれていた。これらの経験をとおして、自分たちの学修の成果が地域社会の人々から興味を持たれることであり、地域社会との連携やコミュニケーションに役立つということを認識できたのではないだろうか。

一方、教職員の立場からみると、「かつうら朝空マーケット」におけるワークショップは単体企画であり、来場者は最初から興味をもって参加しているため、受け入れられやすい企画であったといえる。また、企画段階では教職員のフォロー、実施段階では勝浦市職員の方々の支援があったが故に成功した面があり、本稿で取り上げた２つの企画のなかでは入門編という立ち位置であるともいえる。学外で実践的な活動を企画するには、現場の環境や主催者の目的意識、参加者層やそのニーズを明確にリサーチすることが重要であり、そのうえで大学側の目的や学生の力量をすり合わせなければならない。今回は特に、連携先のスタッフ及び地元住民との距離が近い環境で、大学側に自由度の高い企画を実践させていただける非常に理想的な運営だったと言えるだろう。

2. DESIGN FESTA

今回のDESIGN FESTAへの出展にかけての運営準備は、前期である７月から準備を開始し、11月にかけての中期的な期間をかけ、３年生が中心となって組織を動かした。自身の制作物を発表することと同時に、事業をこなすための企画及び組織作り、運営方法を体系的に実践する機会としているため、教職員のフォローは最小限に留め、学生主体の取り組みを見守る形とした。

前述したようにCOVID-19の影響により参加経験のある学生が一部の４年生のみという状況であったが、それ故に学生メンバーが一新したことで、形成されてしまった過去の出展の定型のようなものに縛られすぎることなく企画が進められ、これまでに見過ごしていた課題や改善点に気づくことができたというメリットもあった。特に、オープンキャンパスの様であった専攻・大学案内に関する展示を、学生らが話し合いながら創意工夫をこらし、大学での学修を生かした空間を築きあげた点は、今までのDESIGN FESTAと一線を画したものといえるのではないだろうか。

今回のDESIGN FESTAへの出展の経過をたどっていると、個人制作や展示表現、団体における運営方法といった様々な視点から見ても、課題を発見しそれを改善するための話し合いや試行錯誤が学生間の中でとられていたことが見受けられる。

ただし、DESIGN FESTAは大規模アート

イベントであり、出展者ごとに出展内容の自由度や独創性・クオリティが非常に高い。その点では、自分たちの展示が周囲の展示のなかで埋没してしまう可能性も高く、「かつうら朝空マーケット」のワークショップとは好対照な企画といえる。

さらに組織の運営の仕方や業務の振り分け方についても工夫をしたが、やはり参加学生のモチベーションの違いがあり、学生の負担の偏りが発生してしまったことは否めない事実である。しかし、来年度へ向けての展望では、今年度参加した学生が多くいることから、今年度の工夫をさらに改良して実施することができるのではないだろうか。DESIGN FESTAは単発企画ではなく、例年行われている企画であり、学生が経験を積むことにより、定型的でない新しい形を模索しつつ実施できるようにフォローしていきたい。

おわりに

紹介した二つの企画には共通して参加した学生もおり、実際に現場にて実感できたと思うのだが、ある意味今回取り上げた二例は一口に課外活動といっても、主催者の目的や消費者の需要といった環境が対照的なプロジェクトにあったと言える。

概念的な知識や技術はあくまでも前提であり、実際の現場に出るにあたっては、主催イベントの目的や現場の環境をリサーチし、その都度の現場に則したプランニング能力が重要である。

多様な業務、多様な人材とかかわる博物館学芸員には、広い視点で全体の状況を把握しながらそれらを取りつなぎ指揮をする、コンダクターとしての資質が必須である。今回課外活動に参加した学生は一つの企画を成し遂げることに、幾数にも絡み合う複雑な課題たちを一つ一つクリアしながら進行しなければならないということを体で理解できたのではないだろうか。

冒頭でも述べたが、学芸員養成課程受講生のうち、学芸員としての就職を目指している学生の数は決して多いとはいえず、とりあえず「学芸員資格」を取得しておきたいと考え受講している学生も多い。学芸員として就職することが難しいという現状も鑑み、大学の博物館学や学芸員養成課程では、学芸員資格やその知見を学芸員以外の職業に活かすノウハウを学ぶ機会を与えるべきだと筆者は考える。その際に実際の現場を体験することは、学芸員を目指す者はもちろん、とりあえず資格を取得することを考えている学生にとっても多くの学びを得ることになる。また、博物館以外での課外活動を体験することは、学芸員資格が学芸員以外の職業にも活かせるということを知る機会となるのではないだろうか。

注

(1) アンケートの詳細な検討については、今後別の機会に行う予定である。

(2) 吉田優の地域調査や地域博物館研究活動に関しては、拙稿「地域博物館の限界と再生―吉田優の地域博物館論と取り組みについて―」(『明治大学学芸員養成課程紀要』第30号、2019年)参照。これらに関する吉田優の業績としては、五霞町史編さん委員会編『町史　五霞の生活史　水と五霞』(五霞町、2010年)、五霞町史編さん委員会編『町史　五霞の生活史　資料Ⅰ』(五霞町、2011年)、五霞町史編さん委員会編『町史　五霞の生活史　資料Ⅱ』(五霞町、2012年)、五霞町史編さん委員会編『町史　五霞の生活史　地誌』(五霞町、2013年)、『アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究　平成24年度～平成26年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C))研究報告書』(明治大学吉田優研究室、2015年)がある。

(3) 平成28～30年度基盤研究(C)「大学と地域社会の連携による生涯学習拠点としての地域博物館再生に関する実践的研究」(研究代表者：

吉田優）など。研究活動の詳細については、『大学と地域社会の連携による生涯学習拠点としての地域博物館再生に関する実践的研究　平成28年度～平成30年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書』（明治大学吉田優研究室、2019年）を参照。

(4) 令和4～7年度基盤研究（C）「大学と地域の連携による学芸員養成と博物館運営に関する実践的研究」（研究代表者：小野真嗣）、2020～22年度和洋女子大学教育振興支援助成「文学と芸術を通じた地域社会参画型表現教育プログラム（SEREAL）」（研究代表者：2020・21年度小澤京子、2022年度小野真嗣）、大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム協議会共同研究事業「共生のための文化芸術プログラム（ACCS）」（研究代表者：小野真嗣）。

(5) 本田洋一『アートの力と地域イノベーション―芸術系大学と市民の創造的協働』（水曜社、2016年）など参照。

Extracurricular activities and outcomes in museology education

ONO Shinji
MATSUZAKI Natsumi

In this paper, we present a specific practical example of extracurricular activities in museology education (“Katsuura Morning Sky Market x Wayo Women’s University silkscreen experience & business trip exhibition” held in Katsuura City, Chiba Prefecture on June 10, 2022).”, and “DESIGN FESTA Vol.56” exhibited at Tokyo Big Sight on November 20, 2022).

It cannot be said that the number of students who aim to find employment as curators among those who take the curator training course is by no means large, and there are students who want to acquire a “curator qualification” for the time being. many. It is thought that the current situation that it is difficult to get a job as a curator is also affecting it. The author has been conducting extracurricular activities for curator training course students and museum studies students for some time, but this includes not only museums but also efforts to explore collaboration with local communities. I believe that the knowledge and skills possessed by qualified curators are well suited to cultural activities and cultural administration in the local community, and I also introduce occupations related to these things. Not only for those who aim to become curators, but also for students who are thinking about obtaining a qualification, experiencing the actual site will be an opportunity to learn a lot. It will be an opportunity to learn that the curator qualification can be used for occupations other than curator.